

論 文

祭司の宝石

吉 野 政 治

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
特別任用教授

The twelve stones on the breastplate of judgement in Exodus

Masaharu Yoshino

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Special Appointment Professor

はつめい

裁きの場に臨むユダヤの高僧の胸当には十二の宝石が四列に三つずつ嵌め込まれているが、宝石の種類と排列には次のように Aaron, Second temple, Exous の三種があるという(注①)。

	Aaron	Second temple	Exous (注②)
第一列	1 紅色の碧玉	紅縞瑪瑙	サーデウス
	2 淡緑蛇紋石	橄欖石	黄玉
	3 緑色長石	翠玉	カーバンクル
第二列	1 鉄礬石榴石	紅玉	翠玉
	2 青金石	青金石	青玉
	3 縞瑪瑙	縞瑪瑙	金剛石
第三列	1 褐色瑪瑙	青玉又はジャーシンス	リグリア石
	2 縞瑪瑙	縞瑪瑙	瑪瑙
	3 紫水晶	紫水晶	紫水晶
第四列	1 黄色碧玉	黄玉	緑柱石
	2 孔雀石	緑柱石	縞瑪瑙
	3 緑色碧玉又は玉	緑色碧玉又は玉	碧玉

Aaron は、『旧約聖書』に登場するモーゼの兄、ユダヤの最初の祭司長のレビ人の名であり(『創世記』)、Second temple は、ダビテ王朝の国家神殿であったエルサレム神殿が破壊され消滅した後、紀元前五百十五年に再建された第二神殿の名である(『エズラ記』)。この Aaron と Second temple の二種に用いられている宝石は、それぞれの故実に基づいて定められたものであるが、その故実の詳細については知ることができない。また、それらの宝石の原名とその訳語が何に基づくものであるかについても不明である。もう一種の Exous は「出エジプト記」の二十八章十五節から二十一節)に見える、モーセに命じたヤハウエの言葉に拠るものようである。その箇所を日本聖書協会の一九五五年改訳で示すと次のとおりである。

あなたはまたさばきの胸当を巧みなわざをもって作り、これをエポデの作りのように作らなければならない。すなわち金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、これを作らなければならない。これは二つに折って四角にし、長さは一指

当り、幅も一指当りとしなければならぬ。またその中に寶石を四列にはめ込まなければならぬ。すなわち紅玉髓、貴かんらん石、水晶の列を第一列とし、第二列は、ざくろ石、赤編めのう。第三列は黄水晶、めのう、紫水晶。第四列は黄碧玉、編めのう、碧玉であつて、これらを金の編細工の中にはめ込まなければならぬ。その寶石はイスラエルの子らの名に従い、その名とひとしく十二とし、おのおの印の彫刻のように十二の部族のためにその名を刻まなければならない。

この「出エジプト記」の文章にあるように、十二という数はイスラエル(ヤコブ)の子の数であるが(それは十二の支族の名前でもある)、四列に飾るのは、その子どもたちが二人の正妻(レアとラケル)と二人の侍女(ビルハとジルバ)から生まれたことによるといふ。

子らの名は「創世記」の三十五章二十二後半から二十六節に見える。同じく日本聖書協会の一九五五年改訳ではその箇所は次のような訳になっている。

さてヤコブの子らは十二人であつた。すなわちレアの子らはヤコブの長子ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルン。ラケルの子らはヨセフとベニヤミン。ラケルのつかえめビルハの子らはダンとナフタリ。レアのつかえめジルハの子らはガドとアセル。これらはヤコブの子らであつて、バタンアラムで彼に生まれた者である。

ヤハウエの言葉には「その寶石はイスラエルの子らの名に従い」とあり、寶石の名と子らの名とは対応するように読み取れるが、それらは両者が同じ名称であるというわけではないようである。ヘブライ語の聖書(『ヘブライ語聖書対訳シリーズ』株式会社ミルトス1983刊による)における十二の寶石の名は次のとおりであり(ひらがなは1またはf音である)。

(第一列) オデム odem	ビトウダー pītdah	ヴァレケット bareget
(第二列) ノフェフ nofeq	サピール sappir	ヤハラム yahalom
(第三列) レシエム leshem	シェヴォー shebo	アハラーマ ahlanah
(第四列) タルシシユ tarshish	シヨハム shoham	ヤシヨフェー yashfeh

子らの名は次のとおりである。

(レアの子) レウヴェン	シムオン	れヴィ
フダー	イツサはル	ゼヴラン
(ラケルの子) ヨセフ	ヴィンヤミン	
(ビルハの子) ダン	ナフタリ	
(ジルバの子) ガッド	アシエル	

ちなみに「The Holy Bible: New Revised Standard Version」(New York Oxford University Press, 1989) でも同様に両者の名前は対応してこそ、寶石の名は、

You shall set in it four rows of stones. A row of carnelian, chrysolite, and emerald shall be the first row; and the second row a turquoise, a sapphire and a moonstone; and the third row a jacinth, an agate, and an amethyst; and the fourth row a beryl, an onyx, and a jasp; thy shall be set in gold filigree.

(Exodus 28:15-21)

であり、子らの名は、

Now the sons of Jacob were twelve. The sons of Leah: Reuben (Jacob's first-born), Simeon, Levi, Judah, Issachar, and Zebulun. The sons of Rachel: Joseph and Benjamin. The sons of Bilhah, Rachel's maid: Dan and Naphtali. The sons of Zilpah, Leah's maid: Gad and Asher. These were the sons of Jacob who were born to him in Paddan-aram (Genesis 35:22-26)

である。

したがって、ヤハウエの言葉はヘブライ語における子らの名が本来意味するものが、それぞれの寶石に托されている意味と対応するといったようなことなかもいれない。しかし、それを明らかにすることは困難なようである。それはヘブライ語で記されている宝石の同定が困難だからである。「The Holy Bible」の Exodus 28:15-21にも「The identity of these stones is uncertain」という注が見える。

2 漢訳と和訳の聖書における宝石名の相違

本稿で考察したいのは、我が国で初めて『旧約聖書』が和訳された時に、「出エジプト記」に見えるこれらの宝石名がどのように訳されたのかということである。

初期の和訳聖書は漢訳聖書の文章を基に作られている。和訳『旧約聖書』の完訳は明治二十一年〔1888〕刊の『旧約全書』(以下これを単に【和訳】と言ふ)を最初とするが、その文章は Bridgman と Culperston による漢訳『旧約全書』(1863刊以下これを単に【漢訳】と言ふ)の文章をほぼ忠実に生かしたものである。例えば「創世記」冒頭の【漢訳】は、

元始時、神創造天地。地乃虚曠、淵面晦冥、神之靈覆育於水面。神曰、宜有光、即有光焉。神觀光為善、神遂分光暗。神名光者昼、暗者日夜。有夕有朝、是乃元日。

であり、【和訳】は

はじめに神天地を創造たまへり。地は定形なく曠空くして黒暗淵の面にあり。神の靈水の面を覆たりき。神光あれと言たまひければ光ありき。神光を善と観たまへり。神光と暗を分ちたまへり。神光を昼と名け暗を夜と名けたまへり。夕あり朝ありき。是は首の日なり。

である。

しかし、本稿が取り上げる「出エジプト記」の当該箇所は、【漢訳】が、一行必為瑪瑙、黄琮、瓊玉、此為第一行、第二行緑玉、青玉、金剛石、第三行赤璋、白瑪瑙、紫玉、第四行黄玉、碧玉、粹玉。

であるのに対して、【和訳】は、

即ち赤玉・黄玉・瑪瑙の一行を第一行とすべし。第二行は紅玉・青玉・金剛石。第三行は深紅玉・白瑪瑙・紫玉。第四行は黄緑玉・葱珩・碧玉すべて金の漕の中にこれを嵌べし。

である。両者に用いられている宝石名を表にすれば（宝石名は文中の出現順序にしたがって記す）、

第一列	【漢訳】	瑪瑙	黄琮	瓊玉
	【和訳】	赤玉	黄玉	瑪瑙
第二列	【漢訳】	緑玉	青玉	金剛石
	【和訳】	紅玉	青玉	金剛石
第三列	【漢訳】	赤璋	白瑪瑙	紫玉
	【和訳】	深紅玉	白瑪瑙	紫玉
第四列	【漢訳】	黄玉	碧玉	粹玉
	【和訳】	黄緑玉	葱珩	碧玉

となる。すなわち、【和訳】の宝石名と【漢訳】とで一致するのは「青玉」「金剛石」「白瑪瑙」「紫玉」に過ぎないのである（注③）。【和訳】の宝石名が【漢訳】に拠っていないとすれば、何に基づいたのであるのか。

3 鉱物学の宝石名

最初の聖書和訳が成立した頃、学問の世界では西洋の鉱物学が移入され、術語としての鉱物名が整備されようとしていた。それらの鉱物名には「青玉」「瑪瑙」「碧玉」といった古来の名称も採用されているが、多くは新たに考え出されたものである。新たに考え出された名前には、それまでには知られていなかったものもあり、それまで区別されることのなかったものが二つ以上に区別され、それぞれについて

新たに与えられたものもある。【和訳】の宝石名は、あるいはこの新しい鉱物学の術語名に拠っているのかもしれない。当時刊行された鉱物学の術語集で纏まったものは次の二つである。

①武藤寿編『金石対名表』（明治十二年〔1879〕刊）。この術語集は明治九年刊の和田維四郎訳の『金石学』（明治九年刊）の附録として編まれたものである。

②小藤文次郎・神保小虎・松島鉦四郎共編『鉱物字彙』（明治二十三年〔1890〕刊）

今、便宜的に“The Holy Bible: New Revised Standard Version”に用いられている十二の宝石の英語名がこれらの術語集ではどのような術語名となっているかを見ると、次のとおりである。

第一列	carnelian	chrysolite	emerald
①	なし	橄欖石	berylに同じ
②	肉紅玉髓	貴橄欖石	碧柱玉
第二列	turquoise	sapphire	moonstone
①	藍寶石	青玉	月石
②	土耳其玉	青玉	月長石
第三列	jacinth	agate	amethyst
①	なし	瑪瑙	紫水晶
②	風信子石	瑪瑙	紫水晶
第四列	beryl	onyx	jasper
①	緑玉石など	截子瑪瑙	なし
②	緑柱玉	縞瑪瑙	碧玉

これらの術語名と【和訳】での宝石名とで一致するのは、第二列二番目の「青玉」と第四列三番目の「碧玉」にすぎない。このうち「青玉」は【漢訳】とも一致するものであった。したがって、【和訳】での宝石名は鉱物学における名称を参考にしたものでもないようである。

ちなみに、これらの術語名は後の和訳聖書では多く採用されている。例えば前掲の日本聖書協会の一九五五年改訳では四列十二の宝石の名は、

第一列	紅玉髓	貴かんらん石	水晶
第二列	ざくろ石	るり	赤締めろう
第三列	黄水晶	めのう	紫水晶
第四列	黄碧玉	締めろう	碧玉

であった。また、一九五六年刊の関根正雄訳『出エジプト記』（岩波文庫本）では、

第一列	紅玉	黄玉	緑玉
第二列	柘榴石	サファイア	月長石
第三列	風信子石	瑪瑙	紫水晶
第四列	貴橄欖石	縞瑪瑙	碧石

である。

4 和訳聖書における宝石名の改称

改めて【漢訳】と【和訳】の宝石名を対応させると、【和訳】に携わった翻訳者たちは、やはり【漢訳】を参考に宝石名を考えたのではないかと思われる。その【漢訳】の利用法は、難解な漢名については理解しやすい語に言い換えるというものだったようである。そのように考えられる理由を、以下詳しく述べたい。

【漢訳】と【和訳】との対照表を再度掲げ、宝石の漢名の和訳化について推測していくことにする。

【第一列】の【漢訳】と【和訳】の宝石名は次のとおりである。

- ① 瑪瑙（漢訳）——赤玉（和訳）
- ② 黄琮（漢訳）——黄玉（和訳）
- ③ 瓊玉（漢訳）——瑪瑙（和訳）

この列の【和訳】の一番目と三番目の宝石は本来は逆に書かれるべきものではなかったかと思われる。すなわち、本来、

- ① 瑪瑙（漢訳）——瑪瑙（和訳）
- ② 黄琮（漢訳）——黄玉（和訳）
- ③ 瓊玉（漢訳）——赤玉（和訳）

とあるべきだったのではあるまいか。仮にそうであったとすると、漢名と和名との関係は次のように考えられる。①については【和訳】は【漢訳】をそのまま踏襲したものととなる。③は「瓊玉」の「瓊」を「赤」に変えたものと思われる。「瓊」は「赤」である（『説文』「瓊、亦赤也」、『説文繫伝』「瓊、赤玉也」）。②の【漢訳】の「黄琮」は『周礼』春官上に「大宗伯曰、以黄琮礼也」と見える語であるが、『説文』に「琮、瑞玉」とあり、「黄琮」は黄瑞玉といった意味となる。【和訳】はそれを単に「黄玉」としたものとと思われる。

【第二列】の対応は次のとおりである。

- ① 緑玉（漢訳）——紅玉（和訳）
- ② 青玉（漢訳）——青玉（和訳）
- ③ 金剛石（漢訳）——金剛石（和訳）

①が【漢訳】では「緑玉」とあり、【和訳】では「紅玉」とある理由は不明である。英訳ではこの部分に用いられている宝石は turquoise であり、turquoise は和田の『金石学』には「其色青キコト蒼天ノ如シ。又綠色ヲ帯ブル者アリ」とあり、鈴木敏編『宝石誌』（集英社1916刊）にも「色は純潔なる空青なるも多くは青緑混濁の色を現はし、又綠色を呈するもの尠とせず。是等の諸色中最も優美なる空青（下略）」とある。Robert Morrisonの『旧遺詔書』（1823）でも「葱玉」とある（「葱」は青色の意）。このように【漢訳】においても英訳においても青または緑色の宝石とされているものが、【和訳】では「紅玉」となっている根拠は不明である。②と③は【漢訳】をそのまま利用したものである。（ただ、「金剛石」が用いられていること自体については考えたいことがある（後述）。

【第三列】の対応は次のとおりである。

- ① 赤璋（漢訳）——深紅玉（和訳）
- ② 白瑪瑙（漢訳）——白瑪瑙（和訳）
- ③ 紫玉（漢訳）——紫玉（和訳）

①の【漢訳】の「赤璋」は『周礼』春官上に「大宗伯曰、以赤璋礼南方」などと見られる。『説文』に「璋、半圭也」とあり、「圭、瑞玉也」とある。したがって、「赤璋」は赤半瑞玉といった意味であり、「赤玉」と訳すことができるが、【和訳】では既に「赤玉」も「紅玉」も用いているので「深紅玉」としたのではないか。ちなみにMorrisonの訳では「火星石」である。②の【和訳】は【漢訳】をそのまま利用したものである。瑪瑙は赤色が知られているが、「白瑪瑙」は李時珍の『本草綱目』にも見られ、同書の『集解』には「宗奭曰」として瑪瑙に紅白黒の三種があるという説を紹介している。③もまた【和訳】は【漢訳】をそのまま利用したものである。ただ「紫玉」は古くから「紫水晶」「紫石英」と呼ばれていたものを指すものと思われるが（英訳も amethyst である）、その名を用いずに「紫玉」としたのは、後に述べるような理由からであろう。

【第四列】の対応は次のとおりである。

- ① 黄玉（漢訳）——黄緑玉（和訳）

② 碧玉(漢訳) — 葱珩(和訳)
 ③ 粹玉(漢訳) — 碧玉(和訳)

この列も第一列と同じく宝石の順序が混乱しているようであり、本来は、

① 黄玉(漢訳) — 黄緑玉(和訳)
 ② 碧玉(漢訳) — 碧玉(和訳)
 ③ 粹玉(漢訳) — 葱珩(和訳)

とあるべきではなかったか。そうであれば、①の「漢訳」の「黄玉」は、「和訳」では既に用いたので、ここでは「黄緑玉」としたことになる。②「和訳」は「漢訳」を踏襲したものとなる。ちなみに「碧玉」は紫がかった青から赤、褐色、緑、黄などの色のものもあるが、宝石名としては「青く美しい玉」を言う。③の「漢訳」の「粹玉」は漢籍にはほとんど見かけない語である。「粹」は「まじりけのない」「うつくしい」の意。【和訳】の「葱珩」もまた珍しい語である。「葱」は青色の意(「珩」は『説文』に「佩上玉也」、「錢注」に「佩上飾也」とある)。和田維四郎訳の『金石学』には「葱珩」の語を Beryl の「漢訳」として紹介し、「玻璃光アリテ薄片ハ透明」「其色ハ海色ノ如ク緑ナレドモ又無色或ハ黄色ナル者アリ」と説明している(和田の言う「漢訳」とは「近來漢訳ノ書」に見える訳語である)。とまかくも【和訳】の「葱珩」は何に拠るものか不明である。

以上、いくつか説明できないものもあるが、およそ【和訳】の宝石名は【漢訳】を参考にしたものと思われる。

5 中国の宝石観から西洋の宝石観へ

ところで、ヘブライ語で記されている宝石の同定が困難であるとすると、それぞれの国での翻訳では司祭の身を飾る宝石に相応しいと考えられるものを選ぶということになる。その場合その判断基準は国によって異なることになるが、【漢訳】に「碧玉」「青玉」「黄玉」「紫玉」「瓊玉」「緑玉」「粹玉」といった「○玉」の形の名が多く用いられているのは、中国においては「玉」が「宝石」よりも尊ばれていたことが影響しているものと考えられる。

「玉」に広義と狭義とがある。漢の許慎の『説文』の「玉部」には「玉属」「石之次玉」「石之似玉」「石之美」「石之有光」といったものが収められているが、この場合「玉部」という時の「玉」は広義であり、その中の「玉属」に属するものは狭義の玉である。また、明の李時珍の『本草綱目』(万曆二十二年〔1596〕刊)の「金石部」は「金類」「玉類」「石類」「鹵石類」に分けられており、「玉類」の項に

は、

玉 白玉髓 青玉(璧玉・玉英・合玉石) 青琅玕 珊瑚 瑪瑙 寶石 玻璃
 水精(火珠・硬石) 琉璃 雲母 白石英 紫石英 菩薩石

が収められているが、この場合「玉類」という時の「玉」は広義であり、その「玉類」の冒頭に挙げられている「玉」は狭義の玉である。

この『本草綱目』では、広義の「玉」の中に「寶石」が含まれているが、それは次のように説明されている。

寶石出三番回鶻地方諸坑井内。雲南遼東又有之。有紅綠碧紫數色。紅者名刺子。碧者名璇子。翠者名馬伽珠。黄者名木難珠。紫者名蠟子。又有鴉鵲石・猫睛石・石榴子・紅扁豆等名色。皆其類也。山海經言、驪山多玉。淒水出焉。西注於海中。多采石。即寶石也。碧者唐人謂之瑟瑟、紅者宋人謂之鞞鞞、今通呼為寶石、以鑲首飾器物。大者如指頭。小者如豆粒、皆碾成珠狀。張勃吳録云、越雋雲南河中出碧珠。須下祭而取之。有縹碧綠碧。此即碧色寶石也。

時珍曰く、寶石は西番、回鶻の地方の諸坑井中から産出し、雲南、遼東にもある。紅、緑、碧、紫等の数色があつて、紅なるものを刺子と名け、碧なるものを璇子と名け、翠なるものを馬伽珠と名け、黄なるものを木難珠と名け、紫なるものを蠟子と名ける。また鴉鵲石、猫睛石、石榴子、紅扁豆など色に因つて名けたものもあり、いづれも同一種である。山海經に「驪山に珠が多い。淒水はそこに源を發して西の方海中に注ぐ。采石が多い」とある。其の采石とは即ち寶石のことだ。碧色のものを唐代に瑟瑟といひ、紅色のものを宋代には鞞鞞といつたが、今は一樣に寶石と呼び、首飾りや器物に装填する。大なるは指頭ほどあり、小なるは豆粒ほどで、いづれも碾つて珠の形に作る。張勃の吳録に「越雋、雲南の河中に碧珠が出る。祭を行つてから之を取るであつて、縹碧、綠碧のものがある」とあり、これが碧色宝石である。(注④)

右の説明に見える美石のうち、「猫睛石」は現在ではキャッツアイ、「石榴子」はザクロ石、「木難珠」はトパーズ、「刺子・鞞鞞」はルビー、「璇子・鴉鵲石・瑟瑟・碧珠」はサファイア、「馬伽珠」はグリーンサファイアと考えられている(注⑤)、これらの美玉の総称が「寶石」であり、狭義の「玉」はその「寶石」より価値のあるものとされているのである。

ところで、時珍は、「寶石」に「有紅綠碧紫數色」とし、その色によつて、

紅色……刺子・鞞鞞

碧色……靛子・瑟瑟・碧珠

翠色……馬價珠

黄色……木難珠

紫色……蠟子

などと分類しているが、【漢訳】の司祭の宝石として現われる「碧玉」「黄玉」「紫玉」「瓊玉」「緑玉」「粹玉」「青玉」もまた、「宝石」を含む広義の「玉」を、その色で呼んだものであろう。

いづれにせよ「○玉」という語は中国の玉思想を帯びた語である。そうした語性を持つ「○玉」という訳語を使用したのは、西洋の宝石を中国の「玉」文化で翻訳したものと云って良いであろう。ただ一つの例外は「金剛石」である。「金剛石」は『広雅』（魏・張揖撰）では「石之次玉」に属し、『本草綱目』でも「玉類」でもなく、「石」に分類されているものである。また、その色についても「金剛石」は他の宝石と違う特徴を持っている。「金剛石」を除く十一の宝石は全て色があるが、「金剛石」は無色透明である。「金剛石」にも不純物により色の着いたものはあるが、尊重されるのは無色透明のものである。李時珍『本草綱目』巻十石類下「金剛石」の項に「西海流砂有昆吾石（中略）光明如水晶」とあるが、我が国の平賀源内の『物類品鑑』（宝暦十三年〔1764〕刊）にも「金剛石は）紅毛人持来ル所ノデヤマンナリ。西川求林齋曰ク、ギヤマンデ又デヤマントモ云。（中略）○蜜産デヤマン、壬午主品中、田村先生具之。ソノ大サ二分許是ヲ指驅（ユビカネ）ニ着ク。其ノ質水精白石英ノゴトシ。至テ明ノ徹ナリ。照^{セバ}之、遠近左右悉クウツル」と見える。「金剛石」は中国では産しないが、【漢訳】の「金剛石」もまた源内の言う「蜜産デヤマン」であり、無色透明のものを指していたものと思われる。

本稿冒頭に紹介したAronおよびSecond templeという二種の司祭の胸当ての宝石には「金剛石」は見られぬ。Exousで「金剛石」に当てられている第二列の三番目の宝石は、それらの訳では「縞瑪瑙」とされている。

聖書の当該箇所の漢訳で「金剛石」が最初に用いられたのはRobert Morrison (1823-34) の『旧遺詔書』(1823) においてである。

即四行玉石、第一行必為瑪瑙玉、嫩琮玉、夜明珠、是乃第一行、其第二行必為葱玉、青玉、金剛石、其第三行必為火星石、金色石、紫玉、其第四行緑玉、阿尼士玉、碧玉也、

W.H. Medhurst の『和英・英和語彙』(1830刊) には「金剛石」は見えない。したがって、このMorrison の『旧遺詔書』で「金剛石」と現われるのが、宝石とし

ての「金剛石」を中国で初めて用いた例になるのではないかと思われる。Morrison が漢訳聖書の中に中国では宝石ではない「金剛石」を用いたのは、ヨーロッパでは「金剛石」は宝石中第一価値を持つものであり、これを司祭の宝石の一つとして用いるのは相応しいと考えたからであろう。

岡本要八郎・木下亀城共著『鉱物名辞典』で、祭司の胸当ての一種であるExousの宝石名が具体的に何に基づくものか不明であるが、少なくとも「金剛石」とあるのは、Morrison の漢訳聖書の影響を受けた【漢訳】の系統の聖書に拠るものである。

明治二十一年〔1888〕刊の【和訳】において【漢訳】に用いられている「碧玉」「青玉」「黄玉」「紫玉」のみならず、「赤玉」「紅玉」「深紅玉」「黄緑玉」といった「○玉」の名を用いているのは、当時の日本における宝石観は、まだ中国の「玉」観の影響下にあったことを意味するのであろう。宝石を「玉」と呼び、色によって「青玉」「赤玉」などと色分けされた名称で呼ぶことは、奈良時代の日本から明治以降に西洋の宝石が輸入され、その西洋の原語名が用いられるようになるまで行われていた。上田敏の『牧羊神』の「薔薇連袴」(大正二年〔1913〕発表) に、「黄玉」にトパズ、「紅玉」にリュビイと振り仮名があるが、そのような形で中国の「玉」観は西洋の宝石観へと移行していったようである。

聖書の和訳において、「○玉」が多用されるのは極初期のものに限られる。その後は本草学や鉱物学の術語名で用いられる漢名が多く現われる。例えば鈴木敏編『宝石誌』(集英社大正五年〔1916〕刊 p108) では司祭の十二の宝石を「紅瑪瑙 carnelian、貴橄欖石 chrysolite、緑寶石 Emerald、紅寶石 Ruby、青金石 Lapis-lazuli、オニックス onyx、藍寶石 sapphire、瑪瑙 agate、水晶 rock crystal、黄寶石 Topaz、緑柱石 beryl、碧玉 jasper」と説明し、一九五五年改訳聖書でも先に見たとおり、

第一列	紅玉髓 ^{こうぎよくすい}	貴かんらん石	水晶 ^{すいしやう}
第二列	ざくろ石	るり	赤緋 ^{あかひ} 緋 ^ひ め ^め のう
第三列	黄水晶 ^{わうすいしやう}	めのう	紫水晶 ^{むらさきすいしやう}
第四列	黄碧玉 ^{わうびよく}	縞 ^{しま} めのう	碧玉 ^{びよく}

であり、一九五六年の関根正雄訳『出エジプト記』(岩波文庫本)でも、

第一の列は紅玉、黄玉、緑玉の列、第二の列は柘榴石、サファイア、月長石、第三の列は風信子石、瑪瑙、紫水晶、第四の列は貴橄欖石、縞瑪瑙、碧玉、とある。聖書の翻訳において、こうした漢語ではなく、カタカナ表記の西洋名が多

く用いられるようになるのは、一九九三年度版の新共同訳『聖書』に、

第一列	ルビー	トパーズ	エメラルド
第二列	ざくろ石	サファイア	ジャスパー
第三列	オパール	めのう	紫水晶
第四列	藍玉	ラピス・ラズリ	碧玉

とあるのが早いようである。西洋の宗教書『聖書』の翻訳において東洋の宝石観が克服されたのはそれほど遠い過去のことではない。

注① 岡本要八郎・木下亀城共著『鉱物名辞典』（風間書房 昭和三十四年〔1959〕刊）「胸板の石」の項。

注② 『鉱物名辞典』にはサーデウス Sardius を「恐らくルビー、紅玉髓、光玉随の一つ」であり、カーバンクル Carbuncle は「透明濃赤色の貴石輝石（鉄礬柘榴石）」などであり、リグリア石 Ligurie は「林檎緑色の榴石」であると説明されている。

注③ Bridgman と Culberston の漢訳以前に成立した Robert Morrison の『旧遺詔書』（1823）じゅうしやう

第一列	瑪瑙玉	嫩黄色玉	夜明珠
第二列	葱玉	青玉	金剛石
第三列	火星石	金色石	紫玉
第四列	緑玉	阿尼士玉	碧玉

となっており、これらとも【和訳】の宝石名は異なるものが多い。

注④ 『新註校定 国訳本草綱目』（春陽堂 昭和四十九年〔1974〕五月刊）の訳による。

注⑤ 益富寿之助「石薬編新注の言葉」（『新註校定 国訳本草綱目』月報4、春陽堂 昭和四十九年〔1974〕五月刊）

